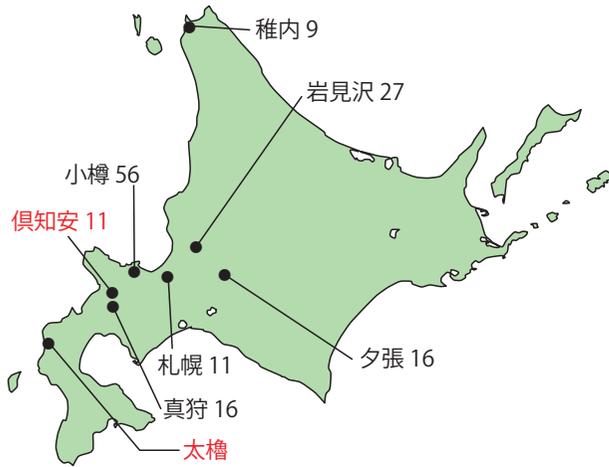


北海道への移民



明治～大正期における串村からの主な移住地と移住者数(『串町史』により作成)
市内からの集団移民は新丸村などほかにもあるが、本項では串村に焦点を当てて紹介。



佐竹智誠が串から持ち込んだと伝えられる阿弥陀如来像(像高67cm)

明治中期、柴山瀧に隣接する三〇〇戸ほどの「農漁村」串村から、一四〇戸もの人達が北海道に移住している。明治十四年(一八八二)同村光玄寺こうげんじ

住職の伯父佐竹智誠ちじょうが十数名の門徒を引き連れ鯨魚にしんで沸き返る北海道渡島半島太櫓海岸みまろ(現せたな町)に移住した。智誠は浄土真宗大谷派説教場を設立、同二十九年に光玄寺の寺号公称が認可され、住民の信仰を集めた。以来故郷の串町では智誠の存在は忘れ去られていたが、昭和四十四年(一九六



光玄寺(手前右)と太櫓海岸(平成21年8月撮影)

九)北海道士別市勝福寺の柳沢昭氏(串町光玄寺佐竹円祐前住職の弟)が太櫓の報恩講に派遣されたことから、両寺の関係が判明し、以後交流が続いている。

加賀團體

現住 石川縣能美郡美野村
 移住 石川縣能美郡美野村

●郷里に於ける状態 本團體は石川縣能美郡美野村及び長野村の農民三二戸より成る同地は小畑町を距る約一里地勢狭長にして申村は畑作長野村は水田を主作とす地味肥沃農耕に適すと雖も地味に比して住民多く一戸の作付反別少しか故に農産物の収入のみにては生計を養ふ難く女子は機織業を男子は運搬業及び傭作操業等に従事し種に糊口を爲せりと云ふ

●移住の概況 明治二十九年手取川汎濫して申村及び長野村の一部は被害甚大しく僅に四分作を以てを以て肥料代と小作料を支拂ふときは糊口を爲し難き状態に陥り一期にして之を恢復する能なきに至りたり是に於て長野村八反田角太郎等が先づ移住の申村の知己中角一郎と協確し北海道に移住し開墾に従事して新生活を別々んと欲し之を一般に呼びしに賛するもの三二戸ありしを以て團體を組織し中島一郎を總

佐賀團體

現住 佐賀縣佐賀郡佐賀町
 移住 佐賀縣佐賀郡佐賀町

なし各戸一頃乃至二三畝の耕馬を飼育す又兼業家畜を飼養するものあり急傾斜地と雖も伐木開墾せられざる農耕不適の地には植樹して團體の共有財産として經營する計畫をなし三十八年より之を實施せり所有地十町歩以上のものは二戸乃至三戸の小作人を入れて耕作せしめ各戸の自作反別は大畧五町歩以上十町歩とする其の作物は粟大豆大豆小麦等にして馬鈴薯稻黍等を常食となす一戸一ヶ年の収入は六百圓以上二千圓にして毎年百圓乃至五百圓の餘剰ありて一般生計餘かなり本團體は移住の當時非常に困難せし能く忍耐事業に勉勵し能く團結の實を挙げ勞苦を厭はず節約家業の隆盛を計れるは稀に見る良成績なり今團體中主なる各戸の状況を録ぐれば左の如し

●八反田角太郎 角太郎は慶應二年六月石川縣能美郡長野村牛島に生る世々農業に従事し種々生計裕かたりしか二十九年約一千圓の資産を携帶し本團體總代として移住し現今は農業の傍ら畑地三十萬坪毛地七百七十七坪と所有して富裕なる生計を営めり角太郎は郷里にありても二三公職に就きしか移住以來は團體公益の事に能く踰躍し又事務委員品評審査員其の他の公職に奉けられて一村の爲めに盡力し又公共各種の事に金品を寄附して木杯賞状を下附せられたること十數回あり今村會議員の職にありて團體員に敬慕せられ村内外有力者の一人なり

●江川與三 明治八年三月郷里石川縣能美郡申村に生る農業の傍ら日雇となして生計豊かならず移住の際には他より旅費を借受けて横濱渡航したり現今畑地五町歩を所有し家族三人ありて熱心農業に従事す本年の作付は粟八反歩馬鈴薯二反歩粟菜二反歩大豆八反歩玉蜀黍五反歩稻黍三反歩鶏豆三四反歩大豆四反歩等あり又附近にて未開墾地四萬坪を譲受け目下小作人を入れ開墾せしむ年收約九百圓あり

●太田作右衛門 申村のものにして當年六十二歳の高齡なれども壯健にして壯年者の如く今尚畑田圃に出て熱心耕作に従事す移住前は小作農の傍ら日雇となして實し生計を爲せしか移住の際資産を賣却して八十五圓を携帶せりと云ふ現今は五町歩の畑地を所有し年々粟一町歩大豆八反歩玉蜀黍五反歩稻黍二反歩粟菜五反歩鶏豆五反歩大豆二町歩小豆一反歩菜馬鈴薯五反歩等を作付し年收約六百圓を生計費を悉りて約三百圓の餘裕あり騎馬一頭及び馬用器械を使用し家族六人皆家業に精勵せり

佐賀團體

現住 佐賀縣佐賀郡佐賀町
 移住 佐賀縣佐賀郡佐賀町

『移住者成績調査』(昭和39年刊)

「加賀團體」の項目の中で、「移住の当時、非常に困難せしも、能く忍耐事業に勉勵し、能く團結の實を挙げ、労苦を厭わず、節約家業の隆盛を計れるは、稀に見る良成績なり」とある。

明治二十九年(二八九六)手取川の大洪水により能美郡各村は大きな被害を受けた。同三十一年申村の中島一郎・長野村牛島(現能美市)の八反田角一郎を中心とする「加賀団体」三二戸が組織され富山県伏木港から渡道、あぶたぐんしもそすけ 虹田郡下曾寿慶(現偵知安町比羅夫)に入植した。「蝦夷富士」と称される羊蹄山西斜面の原野を北海道庁から借り受け開墾を開始、同三十四年貸付地全ての開墾が成功し、各戸五町歩ずつの土地を付与された。同三十九年北海道庁が刊行した『移住者成績調査第一編』では、加賀団体を著しい成功事例として大きく紹介している。



羊蹄山の山麓に広がる開拓地(上)
 畑の彼方にはニセコアンヌプリがそびえる(下)



かで入植者の心の拠り所となってきた浄土真宗大谷派円融寺えんゆうじの門前に、入植者全員の名を刻んだ「崇徳碑」が建立され、顕彰の営みが続けられている。入植者の多くは米作適地を求めて近隣平野部に移転したが、比羅夫地区では二〇軒余の農家が明治の開拓地を引き継ぎ、火山灰地に適したじゃがいもの栽培を行っている。(新本欣悟)